月刊FALCOM MAGAZINE

Vol.
176



ついに発売！
エステルとヨシュアの物語が今始まる！
『空の軌跡 the 1st』

英雄伝説 空の軌跡
&
啄木鳥しんきのFalcom日和

ファルコムニュース

英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



新たな冒険が今始まる――

空の軌跡 the 1st

ソラノキセキ ザ・ファースト

好評発売中！

『軌跡』シリーズの原点『英雄伝説 空の軌跡 FC』の完全フルリメイクとなる『空の軌跡 the 1st』。9月19日に発売された本作だが、これから始めようと思っている人も、すでにクリアしてやりこみ要素を楽しんでいる人も、それぞれの『軌跡』ライフを楽しんでいるはず。また、まだゲットしていない人でも、序章がまるまる楽しめて、セーブデータを製品版に引き継げる体験版が各ストアで配信中なので、まずはそこからプレイしてみるのもオススメだ。
追加のお楽しみ要素として、9月25日には衣装の着せ替えができるDLCや、アクセサリーが配信中。20周年を経て、新たなスタートを切った『空の軌跡』からまだまだ目が離せない！

空の軌跡 the 1st　好評発売中

●ジャンル：ストーリーRPG
●対応機種：Nintendo Switch 2 / Nintendo Switch / PlayStation 5 / Steam
●プレイ人数：1人　**●CEROレーティング**：B
●価格：【ブレイサーBOX（パッケージ）】15,400円（税込）
【通常版（パッケージ／ダウンロード）】8,800円（税込）
【Nintendo Switch 2 Edition（ダウンロード）】8,950円（税込）
【デジタルデラックス版（ダウンロード）】12,100円（税込）
【シーズンパス（ダウンロード）】3,850円（税込）
【アップグレードパス（ダウンロード）】150円（税込）

パッケージ版･ダウンロード版いずれかのNintendo Switchソフト『空の軌跡 the 1st』をご購入のお客様は、アップグレードパス」をご購入いただくことで『空の軌跡 the 1st Nintendo Switch 2 Edition』をお楽しみいただけます。

『空の軌跡 the 1st』公式サイト
https://www.falcom.co.jp/sora/

▶ファルコムニュース◀

ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

「空の軌跡the 1st」発売記念WEB抽選会開催中！

「空の軌跡 the 1st」の発売を記念して、日本、世界中どこからでもご応募いただけるWEB抽選会を開催。クイズ正解者の中から抽選で総計227名さまに豪華賞品をプレゼント！

●問題
本作では、ストーリー以外でのキャラクター達の会話も見どころ満載！
ゲーム第1章、ロレントからボース地方に向かう3人の道中の会話で画像の【?】に入るセリフをお答えください。



◆賞品

A賞:出演キャストサイン色紙（計37名様）



①エステル&ヨシュア寄せ書きVer.
エステル（高柳知葉）
ヨシュア（藤原夏海）

②メイン8キャラ 寄せ書きVer.
エステル（高柳知葉）
ヨシュア（藤原夏海）
シェラザード（安済知佳）
オリビエ（子安武人）
アガット（八代拓）
クローゼ（羊宮妃那）
ティータ（飯田ヒカル）
ジン（稲田徹）

③カプアー家 寄せ書きVer.
ジョゼット（永瀬アンナ）
キール（田丸篤志）
ドルン（丹沢晃之）

④遊撃士チーム 寄せ書きVer.
クルツ（大海将一朗）
アネラス（徳井青空）
カルナ（天海由梨奈）
グラッツ（畠中祐）

⑤エステル（高柳知葉）
⑥ヨシュア（藤原夏海）
⑦シェラザード（安済知佳）
⑧オリビエ（子安武人）
⑨アガット（八代拓）
⑩クローゼ（羊宮妃那）
⑪ティータ（飯田ヒカル）
⑫ジン（稲田徹）
⑬カシウス（浜田賢二）
⑭ラッセル博士（塩屋翼）
⑮アルバ教授（飛田展男）
⑯ロランス少尉（日野聡）
⑰リシャール大佐（古川慎）
⑱カノーネ大尉（近藤玲奈）
⑲アイナ（鈴代紗弓）
⑳ナイアル（鶴岡聡）
㉑ドロシー（遠野ひかる）
㉒メイベル市長（大西沙織）
㉓リラ（山崎エリイ）
㉔モルガン将軍（堂坂晃三）
㉕ジョゼット（永瀬アンナ）
㉖キール（田丸篤志）
㉗ドルン（丹沢晃之）
㉘ジャン（伊東健人）
㉙秘書ギルバート（河西健吾）
㉚シード少佐（高梨謙吾）
㉛エルナン（堀金蒼平）
㉜クルツ（大海将一朗）
㉝アネラス（徳井青空）
㉞カルナ（天海由梨奈）
㉟グラッツ（畠中祐）
㊱ユリア中尉（松井恵理子）
㊲ミュラー（木島隆一）

B賞:オリジナルTシャツ（Lサイズ）（計10名様）



C賞:アクリルキーホルダー（8種セット）（計20名様）



D賞:アクリルキーホルダー（2種セット）（計160名様）
①エステル&ヨシュア　③アガット&ティータ
②シェラザード&オリビエ　④クローゼ&ジン

■応募期間：2025年9月19日（金）10:00～10月26日（日）23:59

抽選会ページ
https://www.falcom.co.jp/sora/special/weblottery/

「空の軌跡 the 1st」エステルモデルの腕時計・ジャケット・バッグが登場！

株式会社アニウェアより『空の軌跡 the 1st』のコラボレーションアイテムが新登場。主人公エステル・ブライトをイメージした腕時計、ジャケット、ショルダーバッグがラインナップ。









■先行予約受付期間：
2025年9月22日（月）16:00～
10月20日（月）12:00

詳細	https://www.super-groupies.com/feature/kiseki_04_watch

フィギュア「レン」「リーシャ」再生産決定！　予約受付中！

コトブキヤから2022年～2023年に発売され、現在入手困難となっている「軌跡シリーズ」フィギュア化 第3弾「リーシャ・マオ」、第5弾の「レン・ブライト」の再生産が決定しました。
※それぞれメーカー受注締切が異なるのでご注意ください。

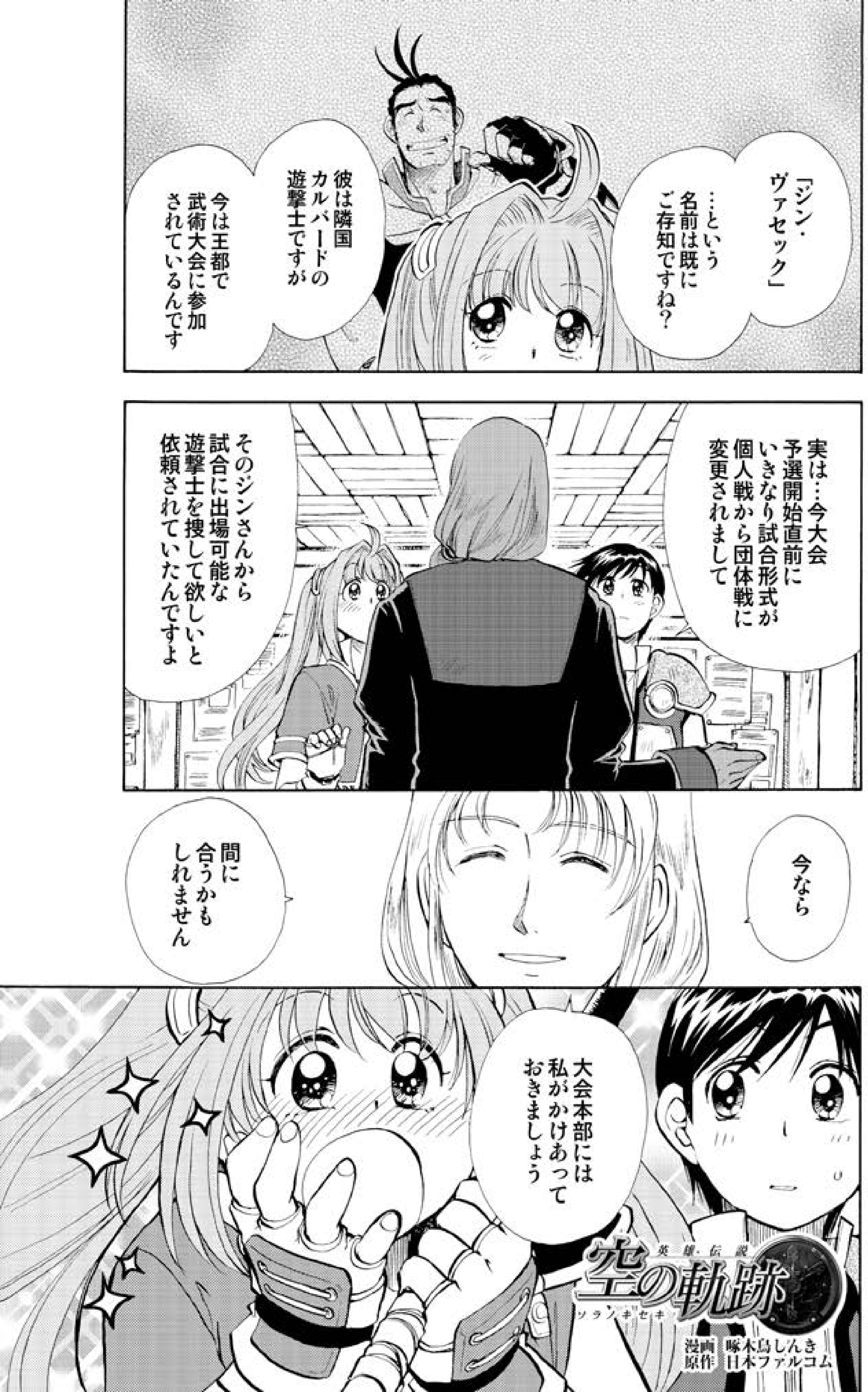






■メーカー受注締切
レン：11月18日（火）※以降は上限に達し次第受付終了
リーシャ：12月9日（火）※以降は上限に達し次第受付終了

コトブキヤオンラインショップ
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054081813/
https://shop.kotobukiya.co.jp/shop/g/g4934054081820/


「ジン・ヴァセック」
…という名前は既にご存知ですね?
彼は隣国カルバードの遊撃士ですが
今は王都で武術大会に参加されているんです
実は…今大会予選開始直前にいきなり試合形式が個人戦から団体戦に変更されまして
そのジンさんから試合に出場可能な遊撃士を捜して欲しいと依頼されていたんですよ
今なら
間に合うかもしれません
大会本部には私がかけあっておきましょう
英雄伝説
空の軌跡
ソラノキセキ
漫画 啄木鳥しんき
原作 日本ファルコム


"輝く環" を目指す一行の前に結社《身喰らう蛇》の執行者たちが次々と現れる。
エステルとヨシュア、アガットの前に立ちはだかる《剣帝》レオンハルト。
かつて兄と弟のように育ったレーヴェとヨシュアが、万感の思いを込め剣を交える!
空の軌跡、ここに完結!
英雄伝説 空の軌跡SC
〜絆の在り処〜⑦
啄木鳥しんき
定価:1,210円(本体1,100円+税) ISBN 978-4-8021-3516-0
発行:フィールドワイ 発売:メディアパル
©Nihon Falcom Corp. All rights reserved.
©Kitsutsuki Shinki
©FIELD-Y
www.field-y.co.jp


ですが
当のジンさんを
口説き落とせるかは
あなた達次第ですよ
頑張って
くださいね
BAR
Bell Inn
居酒屋
サニーベル・
イン…
こ
こ
こ
ここね!?
は
は
はいるわよ!?
たのもー!!
熊さん
どこかな!?
どこにいる
のかしら!?


エステル
え
あ!
ピアノの
生演奏だよ
いたー!!
よおっし!!
あたし
いってく…
エステル!
ちょっと
落ち着こう
がしっ!!
だって
ヨシュア!!
武術大会よ!!
あたしたちも
出場できるかも
しれないのよ!!
うんうん
そうだね
僕は君の気持ちが
よ―――く
わかるんだけどね
でも全ての人が
君の考えを簡単に
受け入れてくれるとは
限らないだろ?
そういう時のために
交渉力を磨く練習も
しておかなきゃ
とにかく
あわてず
相手に失礼の
ないように
筋道を立てて
粘り強く
…ね?
あ…
あの!
お食事中に
失礼します!


こ…
こんばんは!!
あたし 遊撃士のエステル・ブライトといいます!!
同じくヨシュア・ブライトです
ジンさんにはエルベの森でお世話になりました
僕たち 今日はグランセル支部受付エルナンさんからの紹介で…
少しお時間よろしいでしょうか?
おう
あの……
おっ おちついて!!
この交渉が成功したらあこがれの武術大会に出られ……じゃなくて!!
これはラッセル博士の依頼を達成するために…ああ、でも、
それ言うとプレッシャーがかかっちゃうから…
……
……
俺に何の用だい?
あ…


あたしたちを熊さんのチームに入れてください!!
ぺこー!!
失礼のないように…
筋道たてて…
いいぜ!
ええ!?
い…いいんですか!?
あれで!?
あ…
ああ…
おう!
あああああ


ありがとう!!
く……
ジンさんっ!!
あたし…頑張るから!!
絶対優勝しようね!?
はっはっは
おう?
優勝か!?
そ…そうか…
モチのロンよっ
わざわざ助っ人が来てくれたんだから優勝を目指さんことには話にならんよな!
できればもう1人助っ人が欲しいところだが…
だとしたら3人だけなのはもったいないですね…
団体戦の定員は4人ですから
そうね
誰か協力してくれる人はいないかしら?
ポロロロ〜ン♪


ジャ〜ン♪
どうやらそろそろ出番のようだね
思えば涙ながらにボクを引き留める美女達を振り切りグランセルへ流れ着いてから早一ヶ月
しかし毎日が刺激的だったロレントと比べて王都での生活はなんと安寧なことか…
ピアノの調べとたわむれるだけの日々を過ごしていたボクの耳にふと何かが聴こえた気がした
そう…それは助力を乞う乙女の祈り…
オリビエ…
あんたなにやってんの!?
呼んだね!?
ビシッ!
ボクの名前を!!
じゃ〜ん♪


名指しまでされてしまっては仕方がないな
しからばこのオリビエ・レンハイム!
君たちの助っ人として華麗に参戦しようじゃないか!
なんであんたはそうやって首つっこんでくるのよ!
隠しても無駄だよエステルくん
ボクは全部お見通しなのさ
君達が武術大会の優勝にかける真の理由もね…
がばり
自分達だけお城の晩餐会に出ようなんてズルイー!!
ボクも仲間に入れて欲しいなー♡
そんなヨコシマな理由じゃないわよっ!!
もーーっ!
だいたい演奏家が武術の大会でどうやって戦うつもりなの!?
なんとか言ってやってよジンさん!


ええっ!?
いいんじゃねぇか?
ほんとにいいの!?
絶対に戦力にならないわよ!?
楽器とか持ってきて試合中に歌う気よ!?
いや
得物は導力銃だろ?
え?
脇の下に一丁携帯してるようだし
歩き方や視線に銃使い特有の動きが出てるな
遠距離武器
中距離武器
スピード系に
パワー系


しかも皆かなりの鍛錬を積んできたと見える
いいチームになると
俺は思うがね!
ありがとうジンさん!!
あたしたち 絶対期待に応えてみせるからね!!


武術大会か…
まぁこれで今回の誌面は埋められそうだな


……
こんな時に…
なんで俺はそんな記事しか書けねえんだ…
あ――っ
！！！
ナイアル先輩――っ
なにやってたんですかあーっ
もう準決勝も終わっちゃいますよーっ
うるせーな！祭りの取材くらいおまえひとりでもできるだろが！
人の話を聞けぇ!!
ほらほら先輩っ見てくださいっ
大変なことになってるんですよ!!
ああ!?
PRESS ONLY

はあっ!!


ピタッ
……
まいった…


勝負あり!!
ジンチームの勝ち!!


やったぁ
なんで
あいつらが!?
予選には出てなかったんだろ!?
ただいまの試合で本日のカードは終了となります
最後に明日行われる決勝戦に勝ち進んだ2組を改めて発表いたします
まずは
カルバード共和国出身
武術家ジン
以下4名のチーム
対するは


王国軍情報部
特務部隊所属
ロランス少尉
以下4名のチーム
情報部!!
特務部隊?
果たして女神はどちらのチームに微笑むのか
明日の決勝戦をお楽しみに


まさか決勝の相手があいつらになるなんて…
なに…心配はいらないさ
恋のパワーはノンストップ どんな障害もブレイクスルーだよ
はっはっはっ
なに言ってんだ
とはいえ…さすがに明日は激しい闘いになるだろう
俺達もしっかり鋭気を養う必要がありそうだな…
そんなわけで今夜も酒場に繰り出すとするか!!
ばん!
もちろん!! そうこなくては!!
がし!
ささっ! 子猫ちゃんたちも早くっ♡
すみません
このオトナたちは……


ちょっと…協会で調べたいことがあるので
僕は遠慮させてください
おお そうか それじゃあ また明日な
グンナイ♡ マイ・スィートハーツ♡
ふたりとも仲がいいね
さてと!
あたしたちも行こうか!?
あたしたち!
協会に行くんでしょ
そうだね 報告もしないといけないし


ふたりともー
おかえりなさーい
あれ?
こんのやろー♡
やーっと帰ってきやがったかー♡
ドロシーにナイアル!
王都に来てたんだ
そーだよー
武術大会も見てたんだよー
エステルちゃーんヨシュアくーん
決勝進出おめでとう♡
試合続きで疲れただろ?
腹も減ってきたんじゃねぇか?
ん!?
う…うん…
まぁ…
そっか!!
よーし!編集部の近くに俺の行きつけの店がある!
そこでゆっくりじっくり話…
メシを喰おう!!
なっ…!?
でも…


やったー先輩ありがとー♡
うわーい♡
待て!?なんでおまえが喜ぶんだ!?
そういうことでしたら喜んでご相伴にあずかります
ぐ…
あれー?
まぁ…いい!
場所を変えるぞ!
は——
辛かったけどおいしかったあ
ねーここのライスカレーは絶品だよねー
おなかいっぱい
けふ
おまえら…記者の薄給をなんだと思ってやがるんだ…
じゃあ…ナイアルさん
まずはそちらのご用件を伺いましょうか


ご用件って…
大げさな…
……
単刀直入に聞くぞ
おまえたち
リシャール大佐の尻尾をどこまで掴んでいる？
…確かに大佐の人気は圧倒的だ
王国の誰もがリシャール大佐の功績や志を盲目的なまでに信じ切っている…


…俺が書いたインタビュー記事のおかげでな
ナイアル
…けどな！
軍上層部で何かが起こってるのは確かなんだ！
不可解な検問の設置や解除命令
犯人に関する目撃情報のもみ消し
…他にも細かい矛盾がいくつもある！
近頃じゃ当の兵士達でさえ軍上層部のやり方にたまらず疑問の声を上げてる有り様だ
にも関わらず
肝心の「上層部」のお偉方の動きが全く見えてこねぇ
ただ1人
ある人物を除いては!!


ナイアルさん
今から話すことは記事にしたくてもできない内容だと思います
安心しな
うちの雑誌にゃ既に軍の検閲が入ってるんだからよ
…よし
わかった!


おまえらは!
明日の決勝全力で戦ってこい!!
はいっ!
その間はこの俺が!!
必要なこと片っ端から調べといてやらぁ!!
ナイアル!
ですが…とても危険な仕事になります
民間人のあなたにこんなことを
くどい!!
このままペンが剣に負けるのを黙って見てられっかよ!
こいつは俺らの戦いだ!!
ありがとう…よろしく頼むわね!!
まかせとけ!
…あ


そういや ヨシュア…
そっちも 何か用件が あるんだろ?
あの…
情報部の人間の 経歴なんかも 調べてもらうことは できるでしょうか
リシャール大佐と カノーネ大尉
それと
ロランス少尉
その… ロランス少尉は 明日の決勝戦の 相手でもありますし…
少しでも情報を いただけると ありがたいので すが…
ロランス・ ベルガー少尉か…
リシャール大佐に 引き抜かれて 情報部の中で 特務部隊の隊長を 任されてる人物だな

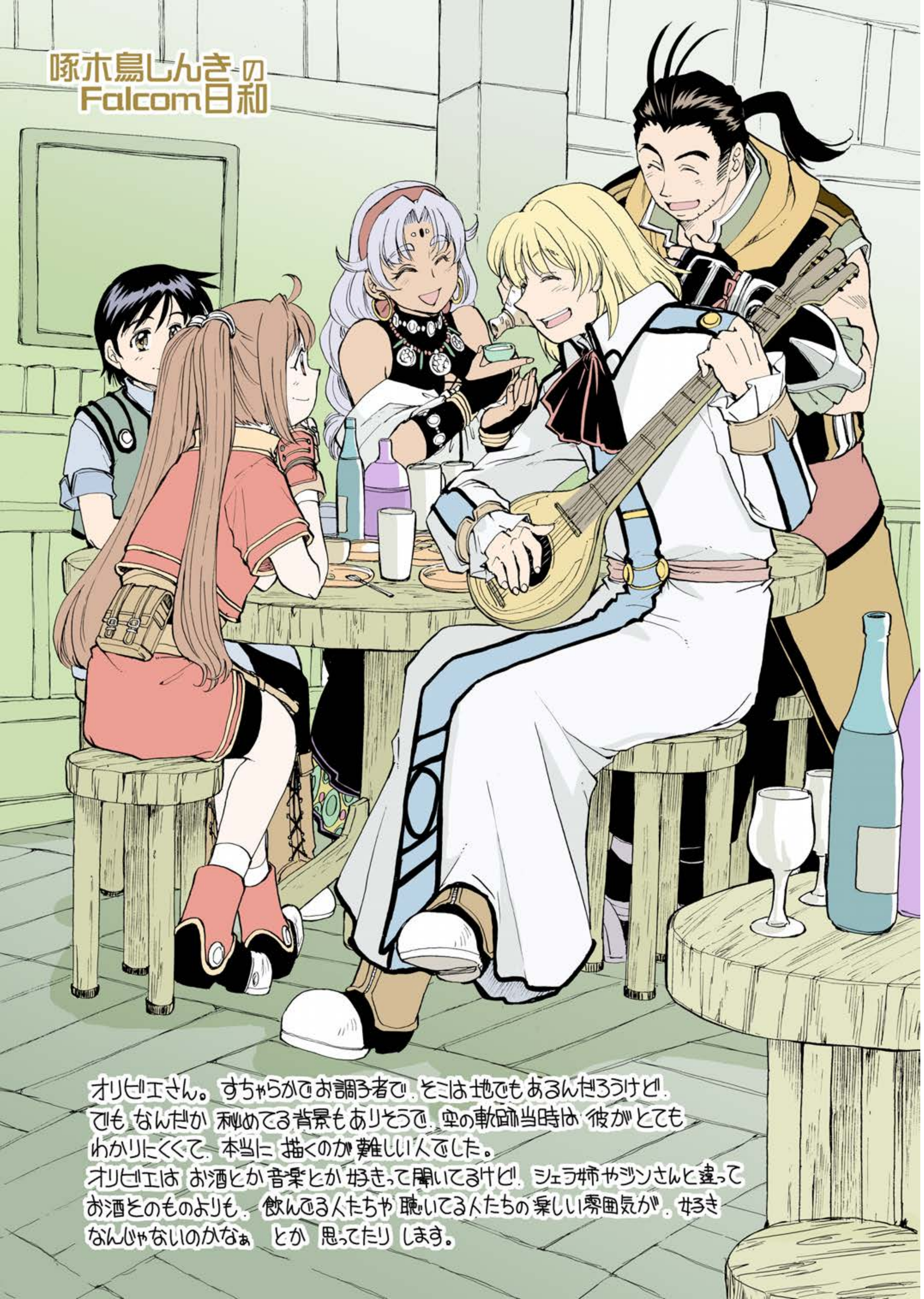

年齢は……
国籍……
……
…すまん 今度までには 必ず…
うっうっうっ…
いいえ! こちらこそ 無理言って すみません
とにかく… 相手は軍です
くれぐれも 気をつけて ください!
おまえらこそ
絶対に 負けるんじゃ ねぇぞ!!


皆様
長らくお待たせしました


これより武術大会最終日
優勝決定戦をはじめます
いよいよだな
まぁ勝負は既に決まったようなものだけどね
見たまえ彼らのあの哀れな姿を
ボクの芸術的な美貌の前ではもはや仮面を被るより他に戦う術がないらしい
あんたは一体何の大会に出てるのよ？
ふざけないでくださいオリビエさん！
甘く見てると痛い目にあいますよ
…だな
泣いても笑ってもこれが最後だぞ
ヨシュア？
そんなにあいつらが気になる？


そう…だね…
彼は…
彼ら…黒装束達が堂々と姿を現したのは
もう存在を隠す必要がなくなったってことだ…
つまり大佐の計画はほぼ完成に近い段階まできてるんだと思う
だとしたらここで負けるわけにはいかないから…
そう思ったら
つい…
それでは両チーム入場してください

よっしゃあ!!
みんな!! いくわよ!!
おう!
出番ね!!
蒼の組 カルバード共和国出身
武術家ジン以下4名のチーム


啄木鳥しんきの
Falcom日和
オリビエさん。すちゃらかでお調子者で、そこは地でもあるんだろうけど、
でも なんだか 秘めてる背景もありそうで、空の軌跡当時は 彼がとても
わかりにくくて、本当に 描くのが 難しい人でした。
オリビエは お酒とか 音楽とか 好きって聞いてるけど、シェラ姉やジンさんと違って
お酒そのものよりも、飲んでる人たちや 聴いてる人たちの 楽しい雰囲気が、好き
なんじゃないのかなぁ とか 思ってたり します。


紅の組
王国軍情報部
特務部隊所属
ロランス少尉
以下
4名のチーム
これより
武術大会決勝戦
を行います
次回に続く

英雄伝説 零の軌跡 〜午後の紅茶にお砂糖を〜

特務支援課メンバーが過ごす
クロスベル自治州のゆる〜い(?)日常！



©YUKIYA MURASAKI, KUBOCHA

第4回

エレボニア帝国とカルバード共和国という大国に挟まれながらも、自治州として独立していたクロスベルを舞台とした『零の軌跡』、『碧の軌跡』シリーズ。続編となる『閃の軌跡』、『創の軌跡』においても激動の中にあり、様々な壁が立ち塞がっていたが、怯むことなく立ち向かっていったのがロイド・バニングス率いる特務支援課メンバーだ。そんな特務支援課メンバーが、もしかしたら過ごしていたかもしれない日常を描く、魅力たっぷりの一冊をご堪能あれ！

製品情報
好評発売中
著　　　：むらさきゆきや
イラスト：窪茶
定　　価：1,210円（税込）

第3話 『ノエルの休日』

雲ひとつない快晴だった。
東通りには風車や果物屋が商品を並べている。
ロイドは特務支援課の仲間たちと手分けして聞きこみをしていた。
もう昼過ぎだ。ひととおり情報を集めたし、そろそろ約束した合流場所へ向かおうか、と思ったとき――
「ん？　あれは……」
白いニット帽とノースリーブセーターに短パンという愛嬌がありながらも快活な格好の少女に目をとめた。
手すりにもたれて、ぼんやりと陸橋の下を走る導力列車を眺めている。
「やあ、ノエル曹長じゃないか」
「わわっ……ロイドさん⁉　お疲れ様です！」
私服だってのに彼女は、お手本として警備隊の教本に載りそうなほど寸分の隙もない敬礼をした。
「はは……相変わらずだな。その服からすると今は休暇じゃないのか？」
「あ、そうでした。あわてると、つい出ちゃうんですよね」
「別にいいんじゃないかな」
「え？」

「それだけ、ノエル曹長が警備隊の仕事に真剣だってことだから」
「あ…………」
少女の頬が、わずかに赤くなった。
ノエル・シーカーが所属しているのは、この街（クロスベル）の警備隊だ。
警備隊は外敵から自治州を守るための組織であり、軍隊のようなものだが――政治的にも地理的にもエレボニア帝国とカルバード共和国に挟まれた特殊性ゆえ、様々な制約を課せられている。
名称や装備だけでなく、訓練の内容にまで。
「警察官の俺が知ってる事情なんて、ごく一部だろうけど、予算も装備も限られたなかで他国の軍隊と同じ重責を担ってるんだ。警備隊は本当にすごいよ」
「うーん、そうなんですかね。目の前のことで精一杯やってるだけですけど……いまいち実感ないです」
「……なにかあったのか？」
「え？」
「いつもより元気がないみたいだ。それに、たいてい休暇はフランと一緒なのに、今はひとりみたいだし」
ノエルとフランは姉妹で、とても仲がいい。ノエルは警備隊員でフランは警察官だが、



休日を合わせて出かけるほどで、とくに妹のフランが〝お姉ちゃん大好きっ子〟なのは警察内でも有名だ。

「ふふ……ロイドさんにはかなわないなあ……さすがは捜査官ですね」

「俺が聞いていいことなのかは、わからないけど……」

「いえ、せっかくだから聞いてください。といっても、情けない話になっちゃいますけど」

二日前——

ノエルは巡回の途中、古戦場の前でクルマを停めた。

助手席のバレル隊員が身を乗り出す。

「なんだこれは⁉」

「酷いですね」

古戦場は見通しが利かない地形のうえ、街道に比べて強い魔物が棲んでいるのでゲートで封鎖してあったのだが、それが何者かに押し破られていた。

ノエルとバレルは軽装甲車から降り、ゲートを調べる。

「魔法（アーツ）とか火薬ではなく、強い力で押し開けたみたいですね。ゲートが曲がっちゃってます」

「つ、強い力だって……？　まさか、大型の魔獣が……あわわ」
「いえ、これは……おそらく、導力車で押し通ったんだと思います」
「なんだって⁉」
「ほら、ゲートに黒色の塗料がついてます。タイヤの跡もありますし」
「なんだ、導力車の仕業か。ほっとしたよ……月の僧院のことを思い出しちゃったじゃないか」
「あのときは大変でしたね」
　ノエルは肩をすくめる。
　以前、月の僧院に出現した奇怪な魔獣を発見したとき、バレルが驚きのあまり寝込んでしまったのだ。
「ふふん、人間がやったとわかれば怖いことはないぞ。どこの誰だかしらないけど、きっちり捕まえてゲートを弁償させてやらないとな！」
「はい！」
「でも、ふたりだけで古戦場に入るのは危なそうだから、応援を呼ぼうぜ！」
「あ、そうですね」
　ノエルはエニグマ――通信機にもなる第5世代戦術オーブメントを取り出し、連絡を取る。

『はい、こちらタングラム門警備隊であります！』
「巡回警備中のノエル曹長です」
『お疲れ様です！』
「ソーニャ副司令に繋いでもらえますか？」
『すみません。副司令は、急に本部から呼び出されてご不在であります』
「また？　最近、多いですね……」
『なにかありましたか？』
「ええ、今、古戦場のゲートにいるんですが――」
　ノエルは状況を説明し、応援を要請した。
　ここまでは問題なかった。警備隊のマニュアル通りの手順だ。
　ところが、古戦場の奥から発砲音が聞こえてきた。
　ノエルとバレルは顔を見合わせる。
「ゲートを押し通った人が、戦ってるんでしょうか？」
「今のは、機関銃の音じゃなかったか？　ただの民間人じゃなさそうだぞ？」
「だとしても、誰かが魔獣と戦っているのは間違いありませんね……」
「なあ、ノエル曹長、妙なことは考えるなよ？　ゲートを壊して機関銃を持ってるようなヤツだぞ。応援を待って慎重に行動したほうがいい」

「たしかに、危険はあるかもしれません……でも、誰であろうと民間人を守るのは警備隊の重要な役目です。応援を待っていたら手遅れになるかもしれないんです！」
「う、うーん……ああ、もう……本当に月の僧院のときを思い出しちゃうよ。よし行こう、ノエル曹長！」
「はい！」

古戦場——

わずかなタイヤ跡を追って奥に進んだノエルたちは、ちょうど魔獣に囲まれているトラックを見つけた。
「黒色のトラック……!!」
「ノエル曹長の言ってたとおりだね。前のほうに傷がついてる」
箱形トラック(バンボディ)の周りには、黒ずくめの機関銃を持った男たちが、全部で四名ほど。
巨大な牙を持つトカゲのような魔獣——ブレードファングと戦っていた。
「くそっ！　ぞろぞろ寄ってきやがって！」
「おい！　もう充分だ、引き上げるぞ！」
「待て、導力車を攻撃されたらまずい……ん？」
「け、警備隊か!?」

こちらに気づいたらしい。
ゲート破りの犯人と、魔獣——どちらも放ってはおけない。
ノエルは迷ったが。
「警備隊です！　魔獣はあたしたちに任せてください！　貴方たちには事情を聞かせてもらいます。そこで動かないでください！」
犯人たちの前に飛び出し、魔獣に電磁ネットを浴びせた。
バレルがアサルトライフルで支援する。
「命令、聞くかな？」
その懸念はノエルにもあったが、まさか魔獣と一緒になって犯人たちを攻撃するわけにもいかない。
黒ずくめたちが、ニヤリと笑った。
「助かったぜ、警備隊さんよ」
「くくく……まったくだな」
「よし、行くぞ！」
「急げ！」
連中はトラックに乗りこむと、ノエルの言葉など無視して逃げ出してしまった。
「なっ!?」

「は～、やっぱりこうなったか……応援の連中が間に合ってればいいけど……」
「くっ……」
　ノエルたちは急いで魔獣を倒し、ゲートまで戻ったが、すでに犯人の姿はなかった。

　その日の夕方。
　本部から帰ってきたソーニャ副司令に、ノエルは古戦場での顛末を報告した。
「すみません……犯人を逃がしてしまって……」
「ノエル曹長の判断は正しいわ」
「しかし……」
　ソーニャ副司令は、ふたりだけで突入した危険性や、犯人を逃がしてしまった過失を「仕方がない状況」と言ってくれた。
　しかし、ノエルには自分が失敗したという思いが強かった。
　副司令が眉をしかめる。
「最近、珍しい魔獣を自治州外のコレクターに売るブローカーがいるらしいわ」
「魔獣をコレクション……ですか⁉」
「ええ、危険だと思うけれど、魔獣を保護する法律なんてないものね」
「古戦場には街道では普段見ることができないような珍しい魔獣がいます……つまり、今日の犯人は……」

「そうと決まったわけではないけれど」
「やっぱり、あたしが捕まえてれば！」
「ふぅ……仕方がないわね。ノエル曹長……」
「はい！　全力で捜索します！」
「そうね。ただし、三日ほど休みを取りなさい」
「ええっ⁉」
「これは命令よ。復唱」
「……あ、はい（イエス・マム）……ノエル・シーカー曹長……三日間の休暇を頂きます」
「ゆっくり街を見てくるといいわ」



「――というわけなんですよ」
　ノエルはうつむいて、肩を落とした。
　ずっと黙って聞いていてくれていたロイドが、ゆっくりとうなずく。
「なるほど。それで、休暇だっていうのに落ちこんでたのか」

「自分が情けなくて……ハァ……」
「うーん……でも、ソーニャ副司令は正しい判断だって言ってたんだろ？　俺も同感だな」
「でも、結局、犯人を逃がしてしまったから……」
「それは仕方ないんじゃないか？」
「警備隊は忙しいのに、こうして休暇を与えられてるのは、やっぱり反省しろってことだと思うんです。私は副司令のお役に立ててないのかも……」
「いや、ノエル曹長……君に限ってそんなことは――」
　そのとき、ロイドのエニグマに着信があった。「すまない」と断ってから彼は懐から取り出し、ボタンを押す。
「はい」
　スピーカーから少女の澄んだ声が漏れ聞こえてくる。どうやら、相手は特務支援課の仲間――エリィだった。
『ロイド、集合時間を過ぎてるけど……なにかあったの？』
「あぁ、ごめん。ちょっと話しこんでたんだ」
『まだ東通り？　もうみんな集まってるし、そちらに行きましょうか？』
「いや、大丈夫だ。予定通り中央広場で落ち合おう」
『わかったわ、待ってるわね』

　ロイドが通信を終えた。
　ノエルは申し訳なくて頭を下げる。
「すみません……お忙しいところ、長話してしまって」
「いや、俺のほうこそ途中になってしまって、すまない」
「あたしは大丈夫ですから、早くみなさんのところへ行ってあげてください」
「……わかった、また会おう。俺も、ノエル曹長にはゆっくり街を見てほしいな」
「え？」
「それじゃ」
　ソーニャ副司令と同じ言葉を残して、ロイドは足早に中央広場へと向かった。
　彼の姿を見送ってから、ノエルはため息をつく。
「ゆっくり街を見る……か。そんな気分でもないけど、線路ばかり眺めてるのも時間がもったいないかな」
　ノエルは龍老飯店で遅めの昼食を取ることにした。

　龍老飯店の名物――天下一炒飯は、ぱらぱらの米粒にもかかわらず噛むとふっくらで、

口のなかで味と香りが広がる。
醤油と胡椒に、エビやカニなど海鮮の風味が添えられ、どれだけ食べても飽きがこない。
スープや餃子との相性も最高だった。
タングラム門の食堂にいるティマスの料理も美味しいが、この味はこの店でないと味わえない。
「ふぅ〜、堪能したな〜」
看板娘のサンサンが話しかけてきた。東方風のドレスがよく似合っている。腰まわりの細さなんて同性でも見とれてしまうほどだ。
「お客さん、いい食べっぷりね」
「え？　あはは……そ、そうですか？」
「おかわりはどうする？」
「ふふ、おなかいっぱいです。ごちそうさまでした」
「ありがとうね！」
ノエルは支払いを済ませると龍老飯店を後にした。

ぐっと伸びをする。
「う〜ん、いっぱい食べたら、ちょっと元気が出たかな」

我ながら単純だなあ、と思う。
さて、次はどこへ行こう？
いつもならフランが新しい店とか、特売セールとか、イベントとか、あれこれ下調べしてくれるのだが、今回は急だったため、彼女のほうは休みを取れなかった。
フランのがっかりした声を思い出す。
「……なにか買っていってあげようかな」
東通りの屋台を眺めてみる。クマのヌイグルミも売っていた。
あのクマ、うちの子に似てるかな？　でもうちの子のほうがかわいいよね――なんて思ったり。
ふらふらと見てまわっていたら、ドンと肩が当たってしまった。
「あっ、すみません」
「へへ……いや、こちらこそ。よそ見してたもんでさ」
相手はノエルより少し年上くらいだろうか。背は高いが痩せており、ひょろっとした印象がある。
髪は長くて鎖のネックレスをぶらさげ、金の指輪をつけていた。物腰はやわらかいが、ちょっと威圧感がある。
「君さ、このへんじゃ見かけない顔だけど、旅行者かい？」

「え？　いえ……」
最近は休暇を取れてなかったし、フランと一緒だと東通りに来ることは少ない。
「ふーん、じゃあ、地元の人？」
「そうですね」
「そうか……今、ひとり？」
「ええ」
「へへ……とっておきのお買い得品があるんだ。よかったら、特別にわけてあげるよ」
愛想のいい笑顔を向けてくるが、どうやら物売りのようだ。
「いえ、そういうのは……」
「そう言わないでさ。な？　こっちに来てくれよ。人前じゃ見せられないんだよね」
「……」
ただの物売りというには、すこし胡散臭い。
警察の真似事をする気はないが、詳しい話を聞いてみることにした。
東クロスベル街道へと伸びる通り道へと連れてこられる。
この時間に街を出入りする人は少ないらしく、周りは閑散としていた。
「そのお買い得品って？」

「へへ……幸運を呼びこむ魔法のアイテムさ」
「まさか……⁉」
しばらく前に起きた事件を連想し、ノエルは警戒心を強める。
だが、彼が懐から出したのは、ぜんぜん関係のなさそうな品物だった。
「……メダル？」
「こいつは、幸運を呼びこむメダルさ。今なら半額にしてあげるよ。お買い得だろ？」
どこかの国の硬貨だろうか。初めて見るデザインだが、それほど特別な物ではなさそうだ。金や銀というわけでもないみたいだし。
「はぁ……たんなる縁起物か」
「本来は20000ミラするが、10000ミラでいいぜ」
「えっ⁉」
法外な要求に絶句した。
「なんなら、持ってるミラ、全部でもいいけどな」
「あなたは……‼」
長髪の男から愛想笑いが消えていた。恫喝するような鋭い血走った目つきで睨んでくる。
気がつくと、ノエルの背後に似たような風体の男がふたりほど近づいていた。
仲間がいたらしい。

囲まれてしまう。
「へへへ……」
「お嬢ちゃん、さっさと買ったほうがいいぜ？」
「そうそう、幸運のメダルがあれば、ケガをしなくて済む。ありがたいだろ？」
「くっ……!!」
こんな連中でも市民は市民、警備隊員である自分がケガをさせるわけにはは。
しかし、これは犯罪だ。放っておくこともできない。
なんとかケガをさせずに捕まえて、警察に知らせないと、とノエルは、あれこれ考える。
男が怒声をあげた。
「さっさと出すもん出しな！　俺たちはこの街を牛耳っているテスタメンツなんだぜ⁉
地元のやつなら、当然、知ってるはずだよな⁉」
「なんですって⁉」
テスタメンツは旧市街を根城にする不良グループだ。
しかし、そのリーダーは、一般市民への押し売りなどという卑劣な犯罪をさせる人物とは思えなかった。
さほど面識があるわけではないが……
あのロイドが気を許すくらいには、筋の通った人物だったはず。

そのとき――
彼らの背後に、すっとひとりの青年が立った。
中性的な美貌の持ち主だった。皮肉めいた笑みを唇の端に乗せる。
「やれやれ、テスタメンツに君たちみたいな恥知らずがいたなんて、知らなかったな」
男たちが慌てて振り返った。
「なっ⁉」
「なんだ、てめえ⁉」
「ッ⁉　待て……こいつは……!!」
長髪の男の制止も聞かず、ふたりが殴りかかる。
「すっこんでろ！」
「くらえ！」
「シッ」
短い呼気と同時に、青年が左手の拳を放った。
男たちには見えなかっただろう。
常日頃から警備隊で戦闘訓練を受けているノエルだからこそ、かろうじて動きを追うことができた。
それほど、速い。

「ガッ……⁉」
「グゥ⁉」
うめき声をもらして、殴りかかった男たちふたりが膝をつく。
最初にノエルに声をかけてきた長髪だけは、青年を知っていたらしい。
「……ワ、ワジ」
「ああ、ワジ・ヘミスフィアさ。一応、テスタメンツのヘッドをやらせてもらってる。君のことは見たことないけどね」
「う、ううぅ……行くぞ、おまえら‼」
「ぐうぅぅ……」
「おぼえてやがれ……‼」
男たちが逃げていく。
ぽかん、と見ていることしかできなかったノエルだが、あわてて追いかけようとする。
「ちょ……あなたたち！　警察に……‼」
「いいから」
ワジに止められた。
その表情は氷のよう――今の男たちを寛大に許したという雰囲気ではない。
「なにか、あるの？」

「どういう意味だい、僕はべつになにも……おや、お姉さんは……」
「あたしは警備隊のノエル・シーカー曹長です」
「ああ、ロイドと一緒にトリニティに来たことがあったよね。軍服も似合ってたけど、今日の格好も、なかなかいいじゃない」
「そ、そんなことより……なぜ、あの人たちを逃がしたの？」
「あんなの小物だろ？」
「君は気にしないかもしれないけど……ああいうのを放っておいたら、この街が、どんどん市民にとって危険な場所になっちゃうんだよ⁉」
「やれやれ、またお説教かい？」
「必要なら何度だってします」
「……ただ逃がしたわけじゃないさ。あれは僕のほうで始末をつける」
「やっぱり、なにか理由があるのね」
「お姉さんは警備隊の人だろ。市内の治安なんて管轄外じゃない？」
「見なかったことにしろって言うの？　そんなことできないよ。管轄なんて関係ない」
「ふむ……困ったな」
「ちゃんと話して」
じっ、とワジを見つめる。

彼は視線を逸らしていたが、ノエルの真剣さは感じているはずだった。
「……人が見てるよ？　笑われてる」
「ごまかしたって無駄です！」
「やれやれ……仕方ない、ついてきなよ」

旧市街、プールバー《トリニティ》——
地下にあるいかがわしい雰囲気の店だった。
以前、来たことがあるが、あのときはロイドたちと一緒だった。
今はノエルひとりだ。
腰掛けたソファーの対面にワジが座っている。
彼の背後にはスキンヘッドで巨躯の男が立っていた。
そして、遠巻きにしているが、そろいの青装束をまとった男たちがこちらを見ている。
彼らこそ本物のテスタメンツだろう。
緊張する。
「……」

「ふふ……まさか、ここまでついて来るなんてね。ノエル、君って意外と迂闊じゃない？」
「一応、ワジくんを信用してるから」
「へえ？　そんなに僕と親しかったっけ？」
「そうね……正確には、あたしが信用してるのは、ロイドさんだと思う」
「ふぅん、なるほどね」
「ワジ君に多少の問題はあるかもしれないけど、あのロイドさんが信用している人なのだから、あたしも信用しようと思う」
「……ただの考えなし、というわけでもないか」
「あの人たちを逃がした理由、教えてくれないかな」
「ＯＫ」
ワジが指を鳴らすと、テスタメンツのひとりがワインとグラスを持ってきた。
手慣れた様子でグラスにワインを注いでいく。
「ちょっと君、未成年でしょう⁉」
「前にも言っただろ？　ノンアルコールさ」
「し、信用できません！」
「……今、僕を信用してるって言ったばかりじゃないか……ほら、君も試してみたら？」
「う……」

ノエルは差し出されたグラスを受け取りはしたものの、口はつけなかった。
「さて、連中に関してだけど……これはアッバスのほうが詳しいかな」
話を振られ、ワジの背後にいる大男が口を開いた。意外にも落ち着いた口調で、まるで神父のようだ。
「三ヶ月ほど前のことだ。彼らはテスタメンツに入りたいと言ってトリニティにやってきた。ちょうどワジは留守にしていたが、そもそもテスタメンツはワジを信望するメンバーが集まって自然とできたもの……入るのも出るのも、決められたルールは存在していない」
「それじゃ、彼らはメンバーの一員なんですか？」
「いや。いくらルールはないといっても、不適格な者であれば、俺が入団を拒否している」
「え？　でもワジ君がテスタメンツのヘッドのはずじゃ……」
「チームのことはアッバスに任せてるからね」
「そ、そうなんだ……」
不良グループのイメージからは遠いけれど、そんなこともあるのかもしれない。
アッバスが話を続ける。
「俺の見立てでは、あの者たちは表で恭順を示しながら裏で悪事を働くような輩に思えたのでな」
「ちょっと会っただけで、そんなことまでわかっちゃうんですか!?」

「その後、街で恐喝をすることまではわからなかったがな」
アッバスは口を閉ざした。
テスタメンツのメンバーから渡されたメモを見ていたワジが、話の後を継ぐ。
「まぁ、そんなわけで……彼らはテスタメンツってわけじゃないけど知らん顔もできないからね。この件は僕たちが始末する。警察や警備隊はお呼びじゃないのさ」
本来ならば、当然、警察に通報するべきだろう。
しかし、彼らは街の不良グループだ。そんな理屈が通じるはずもない。
「あれ？　でも、おかしくない？　それなら、なおさら逃がした理由がわからないんだけど……」
「群れないと悪さもできない小物たちが、テスタメンツを騙ってメダルの押し売りなんて、ちょっと巧妙すぎると思わない？」
「あ……言われてみれば……」
「黒幕がいるのさ。そいつは街の不良を使ったり、以前のマフィアのルートを利用して、ずいぶん強引にミラを掻き集めてるみたいだ」
聞き捨てならない言葉が飛び出して、ノエルは身を乗り出した。
「マフィアのルート!?」
「もう、個別の事件については警察が動いてる。特務支援課にも要請が行ってるみたいだ

よ?」
「なっ⁉」
警察の一部署である特務支援課への要請が、こんな不良グループに流れているなんて驚きだった。
あとでフランに伝えておかなければ、と思う。
ワジがグラスを傾ける。ルビー色の液体が形のいい唇を濡らした。
「ふふ……おしゃべりはおしまいだよ。これから僕は用事がある。さあ、お客様がお帰りだ」
彼がソファーから立ちあがる。
同時に、テスタメンツのメンバーたちがノエルに近づいてきた。
まるで教主に従う信徒のようだ。
先ほどの長髪の男たちとは全く違う不気味な威圧感。
「くっ……事情を知った以上、あたしだって見て見ないふりをすることはできない！」
「ワジの言葉は絶対だ。ここは帰ってもらおう」
「きみ、ボタンが取れかけてる！」
「え?」
ノエルに手を伸ばそうとしていた青年が、あわてて胸元を確かめる。
「そっちのきみはリストバンドが緩んでる！ 制服を着るなら、きちっと着なさい！」

「や、Ja.（ヤー）」
もうひとりのメンバーも、ノエルに気圧された。
このまま黙って帰るわけにはいかない。
「ワジくんの〝用事〟って、その黒幕に絡んだことだよね? それなら、あたしも行く。このまま放っておくなんてできないもの！」
「やれやれ、そのクソまじめな性格、誰かさんを思い出すね。これは、なにを言ってもムダかな?」
「ちゃんと戦力になるから」
「その格好でかい?」
「非番だけど、緊急招集に備えて最低限の装備はもってきてる」
ノエルはバッグからサブマシンガン（ラピッドフレイム）を取り出した。
びしっ、と見せつける。
ところが、ワジが肩を揺らして苦笑した。
「いや……そういうことじゃなくてさ。ふふ……アッバス、こちらのお姉さんに服を用意してくれるかな?」
「いいのか?」
「まぁ、女性が同伴してるほうが警戒されにくいしね」

ノエルの頭に『?』マークが飛んだ。
てっきり黒幕の居場所に乗りこむのだと思っていたのだが、違うのだろうか。
「僕の見立ててでは、84、60、86でDってところかな」
「え？　あっ⁉　ちょっ……えええっ⁉」
ノエルは思わず胸元を両手でかばった。ちゃんと服を着ているのに、まるで裸にされたみたいに恥ずかしい。
「その反応は当たりみたいだね」
「ふむ、ではすぐ用意しよう」
淡々とアッバスがうなずく。
「な、なに？　服って、どういうこと⁉」
「ふふ……最高級のレストランに入るなら、ドレスは当然じゃないか」
ワジが貴婦人をエスコートするホストの笑みを浮かべた。
そういえば、彼の副業は……

歓楽街――

ノエルたちはクロスベルが誇る最高級レストランのひとつ《プレミアム》の前にいた。
細長い塔のような建物が全てＶＩＰをもてなすための店になっている。
夜の街で窓明かりに照らされ佇む、蒼い正装に身を包んだワジは、まるで物語の世界からやってきたかのようだった。
「ヒールは低めにしたけど、慣れないかな？」
「え？　あ、うん……それに、このひらひらしたのが……」
ノエルに用意されたドレスはピンク色で、フリルスカートはかわいらしいが、胸元も背中も開いた艶っぽいデザインだった。
恥ずかしくて外に出られない、と半泣きになっていたら、ワジが白いファーショールを羽織らせてくれたのだ。
一応、気遣われているのかもしれない。
上等な絹に、本物の毛皮。
形のいいリボンと、揺れるフリル。
――こんなの、フランだったら似合いそうなドレスだけど、あたしには似合ってないだろうな――とノエルは、こっそりため息をついた。
「レストランに入れば、しごく当然の格好さ。あまり恥ずかしがってると目立っちゃうよ？」
「そ、そうだよね……」

ノエルは警察官ではないが、これは潜入捜査のようなものだ。おどおどして犯人に警戒される新米みたいな失敗はしていられない。
小さなバッグに納めた銃の重みを確かめる。
「大丈夫……行こう、ワジ君」
「……へえ、仕事をする顔つきになったね」
ワジに連れられて、ノエルは《プレミアム》の四階を訪れた。
黒を基調とした内装。
意外と柱が多く、テーブルのほとんどに視界が通らない。
個室のように区切られてはいないのに隣の客と目が合うことはない。そんな造りだった。
店の奥にはグランドピアノが置かれ、綺麗な女性ピアニストが静かな曲を奏でている。
「見てごらん、奥のほう」
「ピアノの横？」
黒色の扉があった。
「ああ……詳しいことは、テーブルで話そうか」
「うん」
「足元が暗いから、気をつけて」
すっと、左手を取られる。

ごく自然な動作なものだから、思わず手を預けてしまった。
「あ……」
今さら急に離したら、変に目立ってしまうだろうか。
うつむく。
いつもノエルは警備隊で戦闘をこなしているから。
女性らしいすべすべした肌ではない、と思われやしないか、気になってしまった。
まさか尋ねるわけにはいかないけれども。
「うぅ……」
ウェイトレスに案内されて、ノエルたちは入口近くの席に腰を下ろした。
このテーブルも他から柱の陰になっている。
「ピアノの横にドアがあったろう？」
「うん」
「あの先がＶＩＰルーム。今回の事件の黒幕は、そこにいる」
「え⁉　どうして、そこまでわかってるの……？」
「街で悪さをしてる小物たちが、僕に締め上げられたんだ。当然、ボスのところへ行って、こう尋ねるだろう。〝ワジに目をつけられた。どうしたらいい？〟ってね」
「そのために、彼らを逃がしたの⁉」

つうっ、とワジが人差し指をノエルの唇に触れた。
「レディが……大きな声を出したらだめだよ？」
「ご、ごめん」
マナー違反でもあるが、そもそも目立ってしまってはいけない。そのうえ、唇に指先で触れられて、ノエルは恥ずかしさに顔が熱くなった。
きっと耳まで赤くなっているに違いない。
ウェイトレスが注文を取りに来た。
ワジがメニューも見ないで料理を選び、すらすらとワインまで注文する。
「ちょっと、ワジ君……」
「目立たないほうがいいだろ？」
「ぐっ……」
さすがのノエルでも、ここで言い争うほどバカではない。飲まなければいいだけだし、犯人たちに気づかれないほうがいい。
店員が一礼して立ち去り、またふたりきりになる。
「ふふ……さしずめ、若いホストと、初めてホスト遊びをする良家のお嬢さんってところかな？」
「はぁ!?」

「僕がホストだってことは、店の者たちは知ってるし。そう思われてたほうが好都合だろ？」
「う……ま、まぁ……」
「それで、さっきの話の続きだけど――」
「だいたい、わかったわ。ワジ君は、わざと逃がして仲間に後をつけさせたんでしょ？」
「正解」
「そして、あたしと話してるうちに、その仲間が戻ってきてメモで報告したんだよね」
「へえ？　メモを見てたことに気づいてたんだ。なかなか、やるじゃない」
「ソーニャ副司令の薫陶（くんとう）を受けてるから」
「タングラム門の副司令か。聞いたことはあるよ、有能らしいね」
「そりゃもう、実質的に警備隊のトップと言ってもいいくらいだし」
「今度、司令に就任するらしいじゃない」
「えっ!?　まだ一般への情報公開はしてないのに!?」
「ふふ……でも警備隊のなかでは発表されてるだろ？」
「それは、まぁ……あ、言えないよ」
ウェイトレスが前菜（オードブル）を運んでくる。お皿の絵が透けるほど薄く切られたハムが乗っていた。
ノエルは目をしばたたく。

「これが高級なんだね……警備隊の食堂だと、お皿にどっさり盛られてるんだけどな……すごく高いのに量が少ないなんて、ちょっと不思議な感じがする」
「食べてみれば、肉の魅力が量と歯ごたえだけじゃないってわかると――」
　ワジが声を潜めた。
「……出てきたよ」
「ッ⁉」
　柱と柱の合間から見覚えのある長髪と、その仲間たち――三人組の姿が見えた。
「ビンゴ。報告は正確だったね」
「なんとか隙を見つけて捕まえないと……」
「いや、僕たちのターゲットは、ＶＩＰルームの中のほうさ。小物はアッバスに任せよう」
「来てるの？」
「ぞろぞろ大勢で動いたら目立つから、僕たちの後から来て、このビルの外で待機する手筈になってる」
「そうなんだ……ワジ君もだけど、あのアッバスさんも、とてもただの不良とは思えないんだけど」
「ふふ……そうかい？」
　三人組がテーブルのそばを通り過ぎ、そのまま店の外へと出て行く。

　気づかれないよう、ノエルたちは前菜を食べて客のふりをし、やり過ごした。
「ふぅ～、行ったみたいね」
「前菜（オードブル）、なかなか美味しかったろ？」
「う……舌のうえでとろける肉があるなんて知らなかったわ。これは、ちょっとダメかも」
「おや？　お口に合わなかったかい？」
「しばらく他のハムが食べられなくなっちゃいそう」
「ふふ……次はスープ、その次は魚料理が出てくると思うよ」
「そうなんだ。はぁ～……他の料理も食べてみたいけど……そういうわけにはいかないものね！」
　ノエルは苦笑しながらバッグを手に取る。見た目に反した重みが、今は心強い。
　肩をすくめてワジが席を立った。
「――じゃあ、行こうか」
「ええ！」



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.176

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 河野崇
デザイン・DTP	株式会社 ACQUA
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（デザインクロッパー）
発行	株式会社フィールドワイ 〒 101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！



3名様

『も～っと集まれ！ファルコム学園』缶バッジ

大人気!! オリジナル缶バッジを5個セットで3名にプレゼント！　※絵柄はランダムです。

ご応募は特設サイトまで▶ http://www.field-y.co.jp/root/falmagap/

メールでご応募の場合は下記フォーマットに記入のうえ、（falmaga@field-y.co.jp）まで
お送りください。当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

件名：vol.176プレゼント係
1：お名前（ペンネーム可）
2：面白かった記事の番号→
　つまらなかった記事の番号→（記事一覧から1つずつ）
3：アンケート①『空の軌跡 the 1st』でお気に入りのBGMは？
　アンケート②『空の軌跡 the 1st』でお気に入りのキャラクターは？
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

記事一覧

1:『空の軌跡 the 1st』特集
2:ファルコムニュース
3:英雄伝説 空の軌跡
4:啄木鳥しんきのファルコム日和
5:英雄伝説 零の軌跡 午後の紅茶にお砂糖を

応募締め切り　10月27日（月）

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、商品の発送のためにのみ利用し、そのほかの目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後3ヶ月を越えて保有することはありません。